

幼児が喜び歌ふ歌 (2)

葛原 しげる

「野山のこらず 花の雲」

「野山 一面 花の雲」

この二句は、同じ事をいはうとしてゐるのだが、どちらが、満開の櫻を、よく形容してゐるか、と考へれば考へるだけ分らなくなるが、後者の方が少し優れてゐると思はれるので、その句にしようとしてみたが、しかし、この句は、先輩の作の中に昔出てゐる句であるので、そのイ、チ、メンの韻に伴ふ多少の冷たさよりも、ノ、コ、ラ、ズの明るさと、ノヤマノコラズの音の面白さをとつたことである。その第二節に散る櫻を歌つた句に、

「風に吹かれて お池を越えて

櫻 どこまで 散つて行く」

としたのは少と由來があり、出典がある。私が初めて、愉快な訓導生活を送つたのが、約二十年前、今も同じ所にある東京の九段下の牛ヶ淵にある精華學校の初等科であつて、運動場から直角に見える清水門の土手に二三株の古い大きい櫻があつてお濠に臨んで満開に咲くや、少しの風にも、花は吹雪に散つて、水に浮び、水を越えた。中には、學校の運動場にも散つて來た。幼稚園の砂場にも舞ひ込む。すると兒童は、蝶々だといつて、その花片を追ふし、少しでも強い風に吹かれた花片は、どこまでも高く舞ひ上つて、九段坂の方へま

て飛ぶかに見えるのであつた。その頃から今に勤
續の唱歌擔任の坪内せん子先生は、和歌の好尚豊
かな方で、櫻の歌を一首示された事がある。その
想を、私は、此の唱歌に貰つたのであつた。随分
昔の話であるが、その間に、それらの櫻は枯れた
り、折れたりしてしまつた。それだけ、春來る毎
に、花咲く毎に、この一面は、他の何處にでもあ
る光景ながら、清水門の櫻を愛惜する情を深め、
日本の花を愛する心を高めてくれる。それとは別
に、小松耕輔氏の曲が、まことに高雅であり、ま
た、晴朗、溫和でもあるので、よく歌はれ、よく
踊られてゐるのが、なつかしい。(「大正幼年唱歌」
第一集、「さくら」)

○
あれ 飛行機が とんで來る

あんなに 早く とんで來る

もう あれ あそこに

とんで來た
今 すぐ 見ないと かくれます

此の一節だけでは短かすぎるから、これを第一
節として、第二節もつけてくれとの御希望が、さ
る幼稚園からもあつたが、第二節をつけても、そ
れを歌つてゐる間に、その飛行機は、速力が速い
んだから、見えなくなつてしまひますから、これ
だけで宜しいのではありませんでせうかと、御返
事したら、

みる／＼中に、ちぎ、とんでいつて、

かくれて しまつた。

といふ事を、そのまゝ歌つてくれとの仰せ。とこ
ろで、又、私の方では

飛行機に限らず、犬でも、馬でも、汽車で

も、お正月でも、

來るまでが楽しみなので、

すぎてしまつては、つまりません

といふと、又、

それは、大人の考へ方で、コドモは、來てしまつた——すんでしまつた。あゝ面白かつた。といつて満足してゐる。飛行機も、かくれてしまつた。あゝ速かつた——といつて、十分に満足する、との仰せでしたから、

なるほどとも思つてゐる。でも、なほ、あんなに速い飛行機ですから、何とか彼とか、つべこべ、繰り返して唱はない方が、大定遠く、一思ひに飛んでゐる飛行機には、ふさはしくも思はれてならないので、中々に、想が、まとまらない。

どなたか、何れかに、決定させて下さい。

（「大正幼年唱歌」第一集の「飛行機」）

○

「幼児の世界には

「ゆらぐ」

といふ言葉は、ごさいません、その代り

「うごく」

と申しますから、今のお唱歌も

「蝶々が舞へば 菜の花うごく

うごくな 花よ」

として頂きたうございますが……」

と申されたのは、大正三年の夏、私共作者三名が、安井哲子先生が主事時代のお茶の水の女高師附屬幼稚園での、日本全國の保育者大會に出て、出版前に、作品を賞演して批評を乞うた時の、ある方の御勸告であつた。

「しかし「ゆらぐ」のと「うごく」のとは、全然、事柄が違ひますし、前の言葉の有つ音の美しさは、後者の陰鬱に比べ物になりませんから

……」

ともいつたのだが、曲の方では、どちらとも同じア

クセントである上、凡てコードモ本位といふモット
に頼つてゐる私共ゆゑ、のち、公刊する時には
「うごく」にしてゐいた。而も、それを歌ひ、歌は
れるのを聞く毎に、

「うごくのではないんだのに……」

と、残念でたまらない中に、十年目、震災で凡て
の本と共に、出版元に於て、大正幼年唱歌の紙型
も焼失してしまつて、全然新しく、版を組み直す
のを幸に、作曲者とも熱心に協議して、原作どほ
り「ゆらぐ」に戻してしまつた。

此の事を、東京保育協會の第五周年記念大會の
時、一寸、お話したら、さる先輩が

「ゆらぐもよからうが、ゆれるが善いではない
か」

といつて下さつた。しかし、地上三尺の所で菜の
花が風に吹かれるのは、どうしても、ゆらぐので
あつて、ゆれるといふ程、緩やがなく、しなやか

でない。どうしても、「ゆらぐ」のである。そし
て、一面には、此の如き事で、語景を少しでも多
くしてやりたく、歌によつて苦もよく覺えしめた
いものだとも考へてゐる。かくて、震災後の、
「蝶々が舞へば菜の花ゆらぐゆらぐな花よ」
となつてゐる次第である。

